

博物館

ニュース



平鉋



平鉋(裏)

平鉋は、板類や角材などの表面を平滑に削るための道具です。対象に合わせて大小の平鉋が使い分けられます。

写真の平鉋は徳島市北沖洲で仕事をしていた木工職人、故大寺喜好氏が使用していたもののひとつです。刃の幅は6.4cmで、台の長さは、27.5cmです。写真左の台の上部に「1949.12.31」という印字と、「K Otera」と彫られた文字が見えます。

木工職人として多岐にわたり、優れた腕を發揮した大寺氏は、多数の道具を所蔵していました。

大小必要とはいえ、平鉋だけでも写真のものを含め、約30点が仕事場に置かれていました。また、右の写真を見ると、台に割目が入ってきたのを補修した痕跡が見られます。一つの道具にこだわり、大切に用い続ける職人の姿をうかがうことができます。

この平鉋をはじめ、大寺氏の所蔵していた道具は、特別陳列「トクシマ・木工芸の道具と技」で紹介します。

(民俗担当：庄武憲子)

南北朝時代の写経と山伏

— 神山町勸善寺所蔵大般若経を例として —

長谷川 賢二

勸善寺所蔵大般若経とその成立

大般若経とは、大般若波羅蜜多経の略で、全600巻から成ります。各地で書写、奉納が行われ、日本史上、もっとも広く浸透した経典でした

さて、ここでは、中世には大栗郷や大栗山といわれた神山町（以下では、中世の神山町域を大栗山と表記）の勸善寺（同町阿野字宮分）に伝来する大般若経を取り上げます。この大般若経は、南北朝時代末期の1387年（至徳4・嘉慶元）から1389年（嘉慶3・康応元）にかけて書写されたものです。黄染楮紙に墨書された卷子本で、明治時代、1965年前後、1970年代後半に修理、欠巻の復元等が行われており、現状では全600巻がそろえられています（ただし、白紙が8巻あります）。1978年には徳島県有形文化財に指定されています。また、2003年には過去に流出した1巻が発見され、後に当館に収蔵しました。

以上のような大般若経は、もとは柚宮八幡宮（神山町阿野二ノ宮に所在する二之宮八幡神社）に奉納されたもので、明治初年に勸善寺に移されたようです。

この大般若経は分散的に書写されており、写経所となった寺社等は19か所、写経者や願主などの関係者も43名にのぼります。



図1 写経所の分布

写経所の分布は、大般若経の奉納先だった柚宮八幡宮の近辺を中心に、大栗山の中が多いのですが、現在の徳島市や佐那河内村、石井町や吉野川市鴨島町などにもありました。そして、讃岐にも写経所があり、国境を越えた広がり見られます（図1）。

このように各地で書写された経巻が柚宮八幡宮に集約され、大般若経一式が成立したと考えられます。14世紀後半、写経事業を媒介とした寺社等のネットワークが形成されていたといえます。大栗山は山深い土地ですが、けっして閉じた世界ではなく、多方面へのつながりの中に位置づけられていたといえるのです。

写経に携わった山伏

以上のような大般若経の中で、とくに巻208の奥書（図2）に注目してみましょう。写経に関わった人物の姿がかなり具体的に浮かび上がるからです。

（尾題前）

宴氏房宴隆

（尾題後）

嘉慶式年初月十六日 般若井 十六善神

三宝院末流瀧山千日大峯葛木両峯 苴藪観音卅三所海岸大辺路所々巡礼

水木石八口伝法長日供養法護 八千枚修行者 為法界四恩令加善云々

後日将続之人々（梵字 ア）（梵字 ビ）（梵字 ラ）

（梵字 ウン）（梵字 ケン）^{（摩）}反 金剛資某云々熊野山長床末衆（梵字 ア）（梵字 ウン）

1388年（嘉慶2）、熊野長床衆である宴氏房宴隆が書き残したものです。長床とは、本来は峰宿における護摩炉壇を意味しましたが、次第に山伏の修行場としての機能を持つ施設の呼称になったものです。長床に依拠する山伏を長床衆と呼びました。

この奥書から、宴隆が熊野那智山での参籠、大峰・葛城山系での入峰、西国三十三所や海岸大辺路の巡礼といった修行を行っていたことが分かります。「海岸大辺路」については場所の特定がむ



図2 卷208奥書



図3 卷210奥書

ずかしいですが、平安時代に四国の海岸沿いをめぐって修行することを「四国辺地」といい(「今昔物語集」、鎌倉時代には山伏が修行として「四国辺路」を行った事例がある(神奈川県愛川町八菅神社所蔵碑伝、「醍醐寺文書」)ことから、四国での海岸めぐりの修行を意味していると考えてよさそうです。こうした内容から、宴隆が旅の宗教者であったことが読み取れます。

一方、巻210奥書を見ると、宴隆が阿波国内でも移動しながら活動していたことが分かります。そこには、宴隆の署名とともに、板西郡(板野町西部から阿波市東部一帯に比定)吉祥寺の僧が書写したことが記されています(図3)。宴隆の勤進によって写経が行われたのでしょうか。このように、阿波国内外を往来する宴隆のような存在は、ネットワークの結節点としての役割を果たしたものと思われます。

ところで、巻208奥書によれば、宴隆は「三宝院末流」と称しています。この部分からも彼の特徴が見いだせます。

「三宝院」は、中世の阿波には確認できません。真言密教の流派である三宝院流に連なるという意味で考えれば、京都の醍醐寺三宝院が該当すると考えられます。こうしたつながりの背景としては、醍醐寺の開山である聖宝への信仰が関連していると思われます。

13世紀後半頃から、聖宝を山伏の祖とする信仰が醍醐寺内にあり、それはさらに熊野長床衆にも受容されていたようです(「醍醐寺新要録」「山伏帳」)。これを踏まえると、宴隆自身に聖宝に連なるという意識があり、三宝院とのつながりを求める面が

あったのではないのでしょうか。

なお、三宝院は近世初期に修験道当山派を組織するというのが通説ですから、宴隆のような山伏がいたことは、当山派の成立史を見直す手がかりにもなっていくことでしょう。

大栗山の求心力

宴隆が大栗山に出自をもつのか、それとも大栗山とは無関係なのかは分かりません。後者の場合を想定すると、大栗山の何が山伏など宗教者を惹きつけることになるのか、考えてみる必要

があります。そのことは、宴隆のみならず、大般若経の成立に関わる問題として重要です。というのも、分散的な写経、そして経巻の集約という流れを考えると、大栗山を中心とする人的交流を導く力が何であったか探る必要があると考えられるからです。

そこで注目されるのが、焼山寺の存在です。この寺は柚宮八幡宮の南西約5キロメートルにあたり、四国霊場12番札所として著名です。「阿波国太龍寺縁起」(10世紀前半～14世紀前半)に弘法大師と関わる山として現れることから、写経が行われた頃には、弘法大師信仰の拠点霊山でもあったといえます。

また、徳島県指定有形文化財である焼山寺所蔵「某袖判下文」(1325年)によれば、修験道と関係の深い蔵王権現や、弘法大師の事績との関連がある虚空蔵菩薩がまつられていました。

断片的ではありますが、南北朝時代までには、焼山寺に弘法大師信仰、蔵王権現、虚空蔵菩薩といった要素が見られたわけですから。そうであるなら、焼山寺を中心にして、大栗山には山伏をはじめとする宗教者の往来が誘発された可能性は高いでしょう。

経巻という史料—おわりに

経巻が史料になるということ、奇異な感じがあるかもしれませんが、しかし、ここでも示してきたように、経巻に書き残された情報が歴史を知る手がかりになることがありますし、経巻自体が歴史性を持っています。こうした史料の世界にも関心を向けていただければ幸いです。(歴史担当)

ナルトサワギクとヒロハフウリンホオズキ

ナルトサワギクは、1976年日本で初めて徳島県鳴門市の埋立地に帰化してるのが発見されたキク科の植物です。サワギクのなかまだったので、発見地にちなんでその名が付けられました。外国からやってきた帰化植物（外来種）でしたが、いったいどの国から来たのか、何ものなのかわからないまま20年間もたっていました。

1996年に私が当館の標本庫（収蔵庫）で標本を調べていた時に、ナルトサワギクそっくりの標本を見つけました。この標本はアルゼンチン産で、1993年開催の企画展「南アメリカの自然」のためにアルゼンチンから入手したものでした。この標本ラベルには、*Senecio madagascariensis* Poir.と学名が書かれていました。これを契機に、さまざまな人の協力を経て、ナルトサワギクがマダガスカル原産の植物であると判明しました。学名がわかるとインターネットや文献などで次々に情報が集まりだし、この植物の姿がわかりはじめました。オーストラリアやハワイなどでは、家畜が食べると成長を阻害するために、大がかりな駆除が行われていることも明らかになりました。

環境省は外来種対策のために法律を制定し、有害なものをこれ以上広がらないようにしていますが、その対象種としてナルトサワギクが候補にあ

がっています。これもナルトサワギクの正体が判明し、その影響がわかってきたからです。

私たちがよく参考にするものに平凡社の「日本の野生植物」という図鑑があります。その草本編の3巻の写真の80ペー

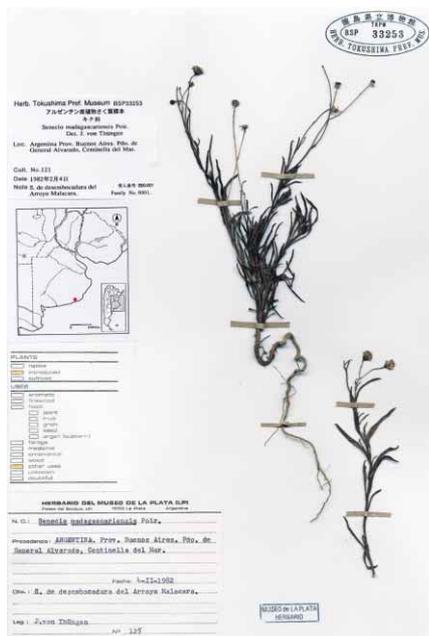
ジにヤマホオズキの写真が掲載されています。徳島市不動町で1974年7月19日に阿部氏によって撮影されたことがキャプションに書かれています。この撮影者は「徳島県植物誌」を作成された阿部近一氏です。ヤマ

ホオズキは徳島県ではめったにみられない植物で、絶滅危惧種になっています。阿部氏もこの植物がヤマホオズキではないと気が付いていて、後に出版した「徳島県植物誌」では同じものをセンナリホオズキの一種としています。当館には阿部氏のコレクションが寄贈されています。センナリホオズキの一種がどのようなものか調べてみたところ、不動町で同じ日に採られた花の付いた標本があり、同じ場所で違う季節に採られた果実のついた標本もありました。それらを検討してみるとセンナリホオズキに似ているが、全体に毛が少ないヒロハフウリンホオズキであることがわかりました。さらに他の産地の標本も検討してみると徳島県ではセンナリホオズキよりヒロハフウリンホオズキの方が多くことまでわかりました。

ある植物が何という名であるかを調べる（同定）のは時として大変難しい場合があります。特に情報の少ない帰化植物などは同定が間違っていたということは珍しいことではありません。しかし、標本がきちんと残っていればそれが本当は何であったのか、後々になってわかります。きちんと標本を作製し、それを公的な標本庫に入れておけば、新しい知見をもとに再検討できるという良い例です。（植物担当：小川 誠）



ヒロハフウリンホオズキ



アルゼンチン産ナルトサワギク

平成17年度第1回特別陳列

「トクシマ・木工芸の道具と技」

徳島の特産品である鏡台、箆笥、仏壇、建具などの木工芸は、藩政時代の船大工たちによる屑材を利用した手仕事に由来するといわれています。長年にわたって高水準の技術の積み重ねに支えられ、名声を博してきました。

博物館では、平成16年度に、優れた木工職人であった故大寺喜好氏が使用していた鉋・鑿などの道具1000点余りの寄贈を受けました。また、唐木仏壇の彫刻製作に関連する資料を収蔵しました。これらの資料を特別陳列として紹介することによって、郷土の産業、木工芸について振り返ります。

- 会期 平成18年1月8日(日)～1月29日(日)
- 会場 博物館企画展示室(1階)
- 観覧料 無料

展示の構成

- (1) 職人大寺喜好氏のこと
- (2) 木工芸の道具
- (3) 唐木仏壇の彫刻

関連行事 (展示解説)

日時：平成18年1月15日(日)
13:30～14:30



徳島唐木仏壇彫刻 (障子用)

平成17年度第2回特別陳列

「失われた交通路 吉野川の渡し」

吉野川は、流域の人々の交通路として、あるいは物資の輸送路として、また文化の交流路として重要な役割を担ってきました。その中で、現在のように多くの橋梁が架設される以前は、「渡し」が川の対岸を結ぶ手段としてなくてはならないものでした。吉野川渡し研究会による調査の成果を中心に、かつての渡しの姿や渡船の様子を振り返り、忘れ去られつつある人と川との関わり方の一端を紹介します。

- 会期 平成18年2月18日(土)～3月19日(日)
- 会場 博物館企画展示室(1階)
- 観覧料 無料

展示の構成

- (1) 上流域の渡し
- (2) 中流域の渡し
- (3) 下流域・旧吉野川・今切川の渡し
- (4) 渡船のすがた

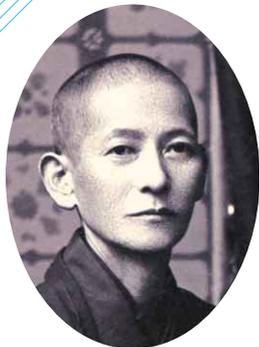
関連行事 (展示解説)

日時：平成18年2月19日(日)
13:30～14:30
平成18年2月26日(日)
13:30～14:30



岩津渡し(左岸)があったところ

須木一胤の資料が寄贈されました



須木一胤の肖像

みなさんは須木一胤という人をご存じでしょうか。「阿波徳島城図」(当館蔵)の筆者です。明治6年(1873)に徳島富田浦に生まれ、脇町中学校教諭をへて同35年に徳島県師範学校教諭になり、昭和3年(1928)に退職し、同11年まで生きました。住吉派の佐香美古に日本画を学び、兄弟子に山本鼎湖、湯浅桑月がいます。また書もたしなみました。

このたび、子孫の須木成芳様より、一胤の資料441件(887点)を御寄贈いただきました。

内容は、一胤の制作した画稿・下絵・書作品のほか、彼の残した記録や道具、蔵書、幕末明治期の錦絵版画などからなり、徳島で活躍した画家や書家の作品もあります。

徳島の書画家の作品は、江戸時代から昭和にまたがり、いずれも一胤が制作や研究の参考とするために集めたものです。ほとんどが未表装の捲りか、一胤自身によって表具された状態です。藩絵師の年記のある珍しい作品や、住吉派の画家の作品、徳島の名鑑類に名前が紹介されるものの、実作例がはっきりとしなかった人たちの作品などが

あります。徳島の漢詩、短歌、俳句界をリードした人たちの自筆短冊もあります。

記録類には、藩絵師の佐々木家にかんする、墓碑や過去帳からの採録があります。謎に包まれていた佐々木家の一端が、これで明らかになると期待されます。また当時流行していた、定期的に有志が古器物をもちよって鑑賞論評する会の記録もあります。一胤たちの会は「無名会」と名づけられていました。

ところで大正12年(1923)には、学制頒布50年を記念して、徳島県教育会が、徳島城公園や師範学校を会場にして「教育展覧会」という一大イベントを開催しました。その折、明治以後の当県における絵画の変遷年表が展示されましたが、その草稿もあります。一胤が年表を作ったこと、彼が、徳島の美術の移り変わりをていねいに調べていたことがうかがえます。

一胤は多才な人ですが、寄贈資料からは、彼が教え子から慕われ、色々な仲間と交流していた様子が活き活きと浮かび上がります。近代徳島の文化は、一胤のような人たちが支えていたのだと、実感させられます。

最後になりましたが、寄贈に御尽力をいただいた土井公平様に、改めて厚く御礼を申し上げます。

(美術工芸担当：大橋俊雄)



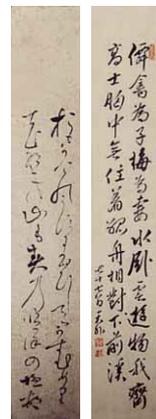
一胤の画稿(左右とも)



矢野栄教筆 大黒天図
栄教は徳島藩の御用絵師。天明9年(1789)正月の年記があるのが珍しい。表装は一胤自身によるもの。この軸には、作品の説明文と、佐々木家にかんする調査メモ(写真右側)が巻きこまれていた。



小沢魚興筆 寿老人図



短冊
左は小杉楹廊
右は福田天外

広重版画 梅に鶯
一胤は大の広重ファンで、年譜をつくり、本の図版の切り抜きや絵葉書まで集めていた。

阿波踊りはもともと、死者の霊を慰めるための踊りだと聞いた ことがありますか…県内にはほかにどんな盆踊りがありますか？

徳島の夏の盆踊りといえば阿波踊りがあまりにも有名です。国内外から、毎年多くの観光客を呼び込む強烈なエネルギーをもった踊りとして知られています。しかし、阿波踊りもその歴史を遡れば、各村落でやっていた鎮魂、鎮送の踊りが原形とされます。時代とともにさまざまな音曲や芸を取り入れつつ変化し、徳島城下の盆踊りとして受容され、第二次世界大戦後に「阿波踊り」と称されるようになりました。

では、鎮魂、鎮送を目的とする盆踊りはどのような変遷をたどってきたのでしょうか。盆踊りの原形は踊り念仏だといわれます。平安時代末期に、死者の霊を慰めるため空也によってはじめられ、一遍によって広められたという踊りです。これが風流化し、時代とともに多様な形に変化したのが、現在の盆踊りということになります。

それでは、鎮魂、鎮送のお盆の踊りをいくつか紹介したいと思います。つるぎ町貞光川見地区には、踊り念仏といわれる踊りが伝えられています。新仏の供養のため、川見堂という四つ足堂内で、近年では毎年8月14日の夜に踊られています（図1）。堂の中央に先達（鉦打ち）が立ち、踊り手はそれを取り囲むように輪をつくって立ち、「ナムアミドレー、ナムデー、ナムデー」と繰り返し唱えながら踊ります。踊りの輪の中に入った人々は、両腕を伸ばし、左右へ揺すりながら左廻りに一斉に両足で跳びます（図2）。昭和20年代には輪に加わる人も多く、各家の長男だけが踊り念仏に加わって跳ぶことができるとされ、信仰上の理由から踊り念仏のときには女性が堂内に立ち入ることは禁じられていました。また、踊り念仏が終わると堂の外に出て、キヨメ踊りが踊られました。

ドブ酒を飲みながら、夜が明けるまで踊りつづけました。若衆はこの後、ほかの地区で行われる廻り踊りという盆や八朔に踊られる踊りにも加わったといえます。このキヨメ踊りは、各地で行われる廻り踊りにも通じるものですが、川見地区では現在行われなくなっています。

踊り念仏が、県内ではつるぎ町貞光川見、木屋の2地区だけで踊られているのに対し、廻り踊りは、徳島県西部を中心に広く分布する踊りです。つるぎ町一宇の定光寺の廻り踊りでは、中央に檜を組んで唐傘を立て、檜の四つ角には竹を立てます。その檜には音頭出しが登って音頭をとり、老若男女の踊り手が輪になって踊ります（図3）。現在、カラオケ大会、抽選会なども同時に行われ、イベント化されてはいるものの、新仏のあった家からは初穂料が納められるなど、死者供養の性格をみることができます。廻り踊りが、八朔踊りとして盆を過ぎた旧暦8月1日に踊られる踊りであったり、集落単位から学区単位でのイベントとして行われるようになったりと、各地でその多様な姿を見ることができます。

その中で明治中期の変化として、広場のなかった地区では、かつて堂内で廻り踊りとしてやっていた踊りをやめ、笛、太鼓、鉦を打ちならして道中を練り歩くように変わったのだと伝えられます。また、一方で堂から広場に場所を移して廻り踊りを続けた地区もあったようです。明確な史料的根拠が乏しく、はっきりしたことはいえないのですが、どうも踊り念仏から鎮魂、鎮送の性格を受け継いだまま踊り自体は時代に合わせて変化し、踊りを担う人々の感覚に合った形につくり変えられてきたようです。（民俗担当：磯本宏紀）

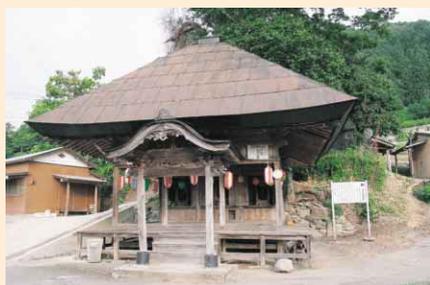


図1 川見堂



図2 川見踊り念仏



図3 定光寺廻り踊り

シリーズ名	行事名	実施日	実施時間	対象(人数)
歴史体験	トンボ玉をつくろう	1月22日	13:30~15:30	一般(10)
	ペーゴマをまわしてみよう	2月5日	13:30~15:30	小学生から一般(30)
	勾玉をつくろう②	3月5日	13:30~16:00	小学生から一般(30)
	わらざうりをつくろう	3月26日	10:00~13:00	小学生から一般(30)
歴史散歩	阿波忌部探訪ツアー 貸切バス使用	3月19日	9:00~17:30	小学生から一般(45)
室内実習	貝化石標本の作り方	1月15日	13:30~16:00	小学生高学年から一般(20)
	ミクロの世界—電子顕微鏡で昆虫を見よう①	1月29日	10:30~12:00	小学生から一般(10)
			13:30~15:00	小学生から一般(10)
	落ち葉の中のいきものたち①	2月12日	13:30~15:30	小学生から一般(30)
	ミクロの世界—電子顕微鏡で植物を見よう②	2月19日	13:30~15:30	小学生から一般(10)
	落ち葉の中のいきものたち②	3月12日	13:30~15:30	小学生から一般(30)
古美術品の保存と取りあつかい	3月18日	13:30~15:30	小学生から一般(20)	
ミュージアムトーク	阿波侯のお抱え蒔絵師・飯塚桃葉	2月11日	13:30~15:00	小学生から一般(50)
	海女・海士道具が語るもの	3月11日	13:30~15:00	小学生から一般(50)
特別陳列関連行事	特別陳列「トクシマ・木工芸の道具と技」展示解説	1月15日	13:30~14:30	小学生から一般
	特別陳列「吉野川の渡し」展示解説①	2月19日	13:30~14:30	小学生から一般
	特別陳列「吉野川の渡し」展示解説②	2月26日	13:30~14:30	小学生から一般

◎ミュージアムトーク、特別陳列関連行事は、申し込み不要です。

その他の行事は、往復はがきでお申し込みください。(受付は、各行事の1カ月前から。10日前必着です。)

◎小学生が参加する場合は、保護者同伴をお願いします。

◎行事は、すべて無料です。

友の会の行事紹介

2005年10月末、友の会の一泊研修で奈良県の「山辺の道」を、万葉歌碑を見ながら歩いてきました。行事担当者、学芸員による解説と豊富な資料により、参加者にとって有意義な2日間となりました。



第1日

- 箸墓古墳
- 山辺の道
海柘榴市(仏教伝来の地)から
金屋の石仏、大神神社、
狭井神社、桧原神社まで
- 飛鳥資料館

第2日

- 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
- 安倍文殊院
- 黒塚古墳
- 天理大学附属天理参考館
- 石上神宮